

私の研究

坂本 彩希絵



学部時代からトーマス・マンの文学を研究してきた私の関心は、本来一貫して「ざわめき」の表象にある。マン作品では波の音、虫の羽音、風雨の音、更には音楽や、オルギア的な喧噪がさまざまな擬音語で描かれる。それらは何かしら暗示的であり、またその頻度、表現の豊富さは注目に値する。

それでは「ざわめき」は何を表象しているのか。この問いが、私の研究の原点だと言っていい。擬音語表現は一方でとてもリアルな言語表現である。海や風の音そのものに可能な限り近づこうとする。しかし他方では、概念的には明瞭な意味を結ばない不確かな表現であるともいえる。そもそも、言語表現の「リアル」とは、概念による表象とその表象対象との関係の質の問題であるように思われる。これはリアリズムに分類される作品を何か一つでも思い浮かべれば自明であろう。それゆえに、概念であることを半ば放棄することによって、リアルさを得る擬音語表現は、概念と現実の関係に打ち込まれた楔となる。

今回の論文では、擬音語表現自体に対する関心は一先ず脇に置き、そもそも言語と現実の問題に関してマン作品が持つ射程を、ニーチェの言語論との関係を中心に探った。トーマス・マンはその叙事的な作風から、言語の指示力への信頼を堅持した作家だと考えられている。しかしながら、彼もまたニーチェの子であることを前提に、取立て深読みを重ねた結果、その言語への信頼が既に指示性を云々するレベルを超えていて、むしろ人間の言語の徹底的な主観性を逆手に取ったニーチェ的な詩学に由来するように思えてきた。これまで「ざわめき」を論じるたびに欲しくてたまらなかった、20世紀的・認識論的な言語観の地平を、何とか開くことができたように思う。

言語を巡る問題意識は九州大学の独文学研究室で、ある一時期に共有されたものである。そこでのさまざまな議論がなければ現在の私はありえない。自由

放任を基本に、ここぞというときに厳しく指導して下さった先生方、根気強く話を聞いてくれた先輩や仲間たちに心から感謝している。

略歴 九州大学大学院人文科学府独文学専修博士課程退学。現在長崎外国語大学講師。2009-2011年 DAAD 奨学生としてボーフム大学に留学。

(さかもと さきえ)

坂本彩希絵さんの「学風」

小黒 康正

坂本さんは九大独文の「学風」を受け継ぐ。学部では池田紘一氏の薫陶を受け、大学院では当方の指導を受け、浅井健二郎氏の講筵にも連なった。研究対象はトーマス・マン。但しこれだけでは「学風」を継いだことにはならない。

坂本さんは自らの内に尺度を持つ。平成21年10月より平成23年3月まで、DAAD 奨学生としてボーフム大学のモーニカ・シュミッツ＝エマンス教授のもとで大いに研鑽を積んだ。しかし、ドイツ文学研究者とはいえず、「ドイツ」に一方的に寄り纏る気はない。あまり時流に染まる気配もなく、総じて聴き耳は内に立てる。詰まるところ、私は私の盃で酒を飲む、ということか。

坂本さんは決意の人である。学部一年次、当方の講義をきっかけに、専門を独文学に決めた。但し履修外国語は英語と中国語。ドイツ語未履修のまま二年次に九大独文に来る。出遅れは言うまでもない。もっとも本人の肝は据わっていたし、それに前例のない受け入れを行った池田氏の懐も実に深かった。

坂本さんは紆余曲折の末、見事に化ける。修論提出日の正午、当方に電話で言う、「提出できません」と。何とか提出させたが、当方、受理するかどうか大いに迷う。すると浅井氏いわく、「受理しよう。坂本なら決して甘えはしない」と。当方なりに肝を据えたが、何よりも浅井氏の眼力が実に鋭かった。

坂本さんは進取の気性に富む。九大文学部では助教として、また九州大学独文学会では事務局会計として、獅子奮迅の活躍をした。苦労は買ってでもする、そんな潔さが坂本さん、否、九大独文の者らしい。今春、長崎外国語大学の講師に着任した。きっと長崎でも「学風」を受け継いでくれるに違いない。

(おぐろ やすまさ/九州大学教授)